

柿の味

胃ろうが造設され、在宅での栄養管理も経腸栄養剤で行われることが多いこの頃。訪問看護で忘れかけていた「食べるのが生きる力をつける」ことを、あらためて教えられる出来事があった。

赤い柿の実が午後の日差しに映える頃、私はいつものようにその老夫婦の家を訪ねた。寝たきりのご主人が元気な時に描いたという柿の絵が、ベッドの近くにあって。「庭の柿も立派だけど、この絵もステキね」と私が言うと、「夫は柿が大好きなの。もう食べられなくなっただけ」と奥様が答えた。「手術のとき『胃ろうはいつでも閉じることが出来る』と先生が言ったから、そのうち食べられるようになるのかと思っていたのに……」とも。

胃ろうのあるご主人は自宅に戻つて以来、一度も口から食事をしていない。誤嚥(ごえん)による肺炎が心配だから仕方がない、と看護師の私も思っていた。しかし、その日は少しでもこの夫婦の気持ちに添いたいと思い、「柿のお味見をしてみませんか？ 体を起こして、

むせないようにするから大丈夫よ」と、味見を勧めてみた。

柿の汁を湿らせたスポンジで、舌の表面をそつと拭うと、ご主人は勢いよくゴックンと飲み込んだ。便秘気味だったお腹もクーツと鳴り、腸の動きを感じる！

「すごい。飲み込みが上手ですね。柿の味、分かりましたか？」というと、うなずきながら一筋の涙が頬を伝う……。わずかな柿の汁で、こんなにも心身がいきいきとしていくとは。

「もう一度口から食事がしたい」と涙が訴えているようだった。もともと食を味わってもらうことを大切にし、胃ろうになっても、口から味わうことを簡単にあきらめさせてはいけない、私はそう心に刻んだ。そして、この出来事は「忘れてはいけない私の看護エピソード」になった。



看護部門
優秀賞